

2024年度 放送大学教育振興会助成事業成果概要

1. 事業の課題名

心理学実験実習に係るオンライン教材の研究開発

2. 研究者情報

所属機関名	放送大学
職 名	教授
研究者・研究 代表者氏名	森 津太子

3. 事業の目的等

本事業の目的は、心理学実験実習に係るオンライン教材を開発することである。具体的には、当該授業で使用する実験課題をオンラインで経験できるように、課題のオンライン化と付属教材の作成を行う。これを実現することで、感染症の拡大などにより対面授業の実施が困難になった場合でも、非対面の授業への移行が容易になる。さらに放送大学では2024年度からBYOD(Bring Your Own Device)方式が導入され、学生が自らPCを持参して、心理学実験実習を受講することになった。実験課題をブラウザベースで行えるようにすることで、学生が持参するPCの環境の違いにかかわらず、実験環境の標準化を実現できる。

4. 事業の成果の概要

本事業は、心理学実験実習において使用される実験課題のオンライン化を推進し、非常時における非対面授業や、BYOD(Bring Your Own Device)導入後の平時の授業においても安定して活用できる教材とシステムを整備することを目的として、3年間にわたり実施された。最終年度である2024年度は、放送大学におけるBYODの本格導入初年度にあたることから、整備した教材やシステムを実際の授業で広く活用し、実用面での検証と改良を行う重要な年となった。

まず、本年度においては、心理学実験実習の3科目それぞれに対して、新たに1種類ずつ、合計3種類のオンライン実験課題を開発・追加した。これにより、これまでに開発した9課題と合わせ、各科目で4種類ずつ、計12種類の課題がオンライン上で実施可能となった。これらの課題は、いずれもHTML/JavaScriptベースで構築されており、特定のソフトウェアを必要とせず、学生が所有する多様なPC環境においても、ブラウザ上で安定して実行できる仕様となっている。これにより、2024年度から全学的に実施されたBYOD方針にも適切に対応し、受講者・担当講師ともに大きな混乱なく、新たな学習・指導体制へと移行することができた。

加えて、教材開発においては、過年度と同様、単に実験課題をオンライン化だけでなく、授業時に使用可能なスライド形式の補助教材も整備し、担当講師に提供した。これらの資料は、実験課題の概要や理論的背景のほか、実験の目的や、結果の整理の仕方、考察のポイントなどを網羅しており、これをもとに、担当講師がさらに工夫をこらした授業を展開できるよう配慮されている。

また、2024年度第2学期からは、オンラインで実施された実験データをウェブサイト上に蓄積し、必要に応じてCSV形式でダウンロードできる機能を導入した。これにより、受講者数が少ないクラスでも、統計的分析に必要なデータ数を確保できるようになり、学習内容の充実が図られた。

さらに本年度は、全国の学習センターにおいて心理学実験実習を担当する講師を対象としたオンライン・コミュニティを整備し、情報共有・意見交換の場とした。これは事業当初の計画にはなかった取り組みであるが、教材の利用が広がるにつれて、現場の担当講師間での知見共有や教材の運用に伴う問題の可視化が急務であると判断し、実施に至ったものである。この場では、オンライン化された実験課題の補助教材やマニュアルを提供するとともに、担当講師からの質問やフィードバックを随時受け付けている。本年度は、寄せられた意見をもとに、実際に、実験プログラムの修正や機能改善を行い、教材の質を向上させると同時に、現場のニーズ

に即した柔軟な改善を重ねる体制を整えた。

なお、当初、本事業では各科目につき 5 課題、合計 15 課題のオンライン化を目標としていたが、最終的には各科目 4 課題、合計 12 課題にとどまった。しかしそれに代わる成果として、当初想定していなかった大学全体の DX 方針（BYOD）に柔軟に対応し、2024 年度からの大規模な制度変更にスムーズに対応できた点は、本事業の大きな成果のひとつである。単なる非常時対策としてのオンライン教材開発にとどまらず、放送大学における新たな教育体制を下支えする基盤として、実用的かつ発展的な意義を持つ成果を達成した。

これらの成果は、心理学系の学会等で発信しており、今後は他大学との教材共有や教育連携の可能性も見据えている。本事業は、遠隔教育・BYOD 環境下における心理学実験実習の標準モデルの一つとして、今後の高等教育の在り方に資する実践的取り組みとして位置づけられるだろう。